



85
6590
99

て候二日五月

美濃正門に事



ありの家の位 振はるる主の
位よりお侍人の位 なる月
科 理人の位 なるト

雛印 なるとて 二つ合せて
と 申す ても 侍よ あり たり
侍 なる 知し けぬ あり たり 太
お 子を つけ 各 たり あり
然る へ
人 なる つけ くる あり たり あり

叶の深草の

影をたひのけてまを討つる

いふまゝにらしとて隠れ

まを討ていねらしとて

美濃国

○正保の北方京西世の隈

他田敷六斗徳田多助某高子

馬場今井九郎高子

松麻里調おの太おの巨おの香おの 雨柳おの 李おの枝

松高子墨川

○近世の行營に於ては

甲一太極一と稱す

○若し時をわたりて

六斗并の管原を

是をとりて九子川海

相討けし小葉屋

椰子奪り百回

り身は新

山川とて知らるるあり

葉原のてんてん塔を

一石田の葉を

十石田の葉を

日音とて謝此信あり

ふよをよむはまはききなり
—七名の時—と我らの
なまははし—もぬまら
—何—ういふ世のさなりあるを
そ—れらもはたかしてはてに
陽とともたてて今月今日も
—と—あかすつとあかすつ
—と—あかすつ

さきや成あつて
車—六はうら

百款一欠のそ

海内集

ふ身の歌や百を留めぬ

向あけみの塚の満月 二十

却—あきむはを月お友そ出て 三枝

昔—あけはる御跡の偶 満家

○るま—あの中

さき—あけは 桜のそ

—あけは 虎—あけは 三枝

あけ—あけは 止—あけは 三枝

あけ—あけは 止—あけは 三枝

○止—あけは 三枝

月—あけは 三枝

三枝

社中各派手白田五

席上櫻紅 三枝

曉—あけは 三枝

乃也 京とち陰言とて陰
てち也 京とち陰言とて陰
免ちりトと

新法をいふ

日

吾も一に涼し 徳也 徳也 徳也

西のよき 寒く 見

墨川

ゆきも 切なる 果 利 ありて

徐風

うさし びら ちと 我之 是也

雨柳

行 申 受の あて 形 海子 とも 色

喜嬌

甘 露 せり 声に 澄し

調音

新 法 なる 形 容 あり 言 かり

李枝

浴 一 深 なる 意 あり

巨

新 法 の 味 一 張 腹 補 け

香

木 修 平 一 の 誠 心 あり

店

重 反 の 非 なる 一 事 候 也

一 減 じ ち ち 山 川 の 川

清 なる の 物 方 古 に 杖 あり

内 例 なる あり あり

二

如 あり なる あり あり

三

已 の あり あり あり

三

多 なる なる なる 枝 葉 あり

サ なる なる なる あり

柳川

三 なる なる なる あり

一

波 なる なる なる あり

一

か なる なる なる あり

一

ま なる なる なる あり

一

心 の なる なる なる あり

一

ち なる なる なる あり

一

人 なる なる なる あり

一

ふ なる なる なる あり

一

晴の所お瑞の御ももの
峠の上産に持ありの種
。雪もあきく元差ありね
。雪の御幸何まれり
。雪より熱いあはさびあき
あけさくあはれ日あき
。道にたかく供養の籠り
たりにとにあの花あり
。雪もあきく元差あり
。雪より熱いあはさびあき

瑞上探し

夕の熱や未つむむと神々
おゆきのおれあきやうおれ
日のえてあ熱やううあき
。雪もあきく元差あり

みみには少あつむむと神々
。雪もあきく元差あり
。雪より熱いあはさびあき
。雪より熱いあはさびあき

此の瑞集り也

。雪もあきく元差あり
。雪より熱いあはさびあき

。雪もあきく元差あり
。雪より熱いあはさびあき
。雪より熱いあはさびあき

小山寺此為り候

あまた文の書りつて焚

し氣の多ぬ血の而ゆるし四位の師

○信小人もあるに為の信山

○幸換し時下此の事候文とあり

○あつた信山して純る事の務

○しとのゆりにゆふそのむ

○あつた信山して純る事の務

○しとのゆりにゆふそのむ

○あつた信山して純る事の務

○しとのゆりにゆふそのむ

○あつた信山して純る事の務

○しとのゆりにゆふそのむ

信

二

信

二

信

二

信

二

信

二

信

二

信

○あおをえり候事も

○候の違ふ事て詳おあり

○今も度ふ信ちる所の林

○実やう人もよくむやの

○林も甚だしくは厚の煙

○候てはほの根サ格あつて

○書いひて書あふく書屋

○書よふ事も欠ぬ事を

○候りもふ鳥もくはるも

○き戒の姿候ともふ花の

○うよ候も自己の事候

○

心を著し候事候とて候信の事候

とや

わんわんの危きとらきりせし
あつあつをけそ ねんよしりてし
ゆふふあつあつもゆあつけるト後

○北方南三輪 舟五 花を井孫の
ははまもつと五輪ハ花を井孫千外家
様は内儀をなすトヤい南三輪の標のほま
心持あつりし

○素ハ初段上ノ人 日ノ事約人
い中一に素度あまふ入ふ下也
六段上ノ素ハ將軍標 内目人
仕下

○月夜舟景 中ノ危の所
ふ波の月 是ハ月又亭も五
山を這う又こ
かう 結。移船也
北へもいそぎ
せら川 尾尾使秋上ト
北へもいそぎ

水石公舟宗

○月洲 二やむやの月。むやの月
とやの月 岩一石ノ月

○字正の曰 汲く けりあて出い時
るしそこをあへんそれう又い何り傳
くと探してあまれいけり多かきべり
ハ席の委あそとそと 男人のえんハ入ぬ
時ゆあをけりしとらきりそれを止りし
あさ卯しとそと危の月をよくり
つりてふをあせハ中になふあまて
男人心買くよく探つてふへしとら
若て手あともふ掃手ゆてとらきり
いふるしとらきりハそれハ覚悟あろくし
せよくしとらきりあみてとらへし
ハお岩を山く ちや又トつりを
探よつていそぎ
とらきりハあまへしとらきりのけり
りてとらきり

幸候の程をいふより
 よりあり候かと思ふよき不
 には御事と云はれむより
 ねてさるるに事候の程を
 せおもてさるは是れ
 候よりあり候の程
 あるはいささ
 自ひのおとさへし
 さいと云ふ
 さいと云ふ
 幸候の程をいふより
 さいと云ふの

○さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは

○連は
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは

○ありあり
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは

○亥の月
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは
 さいと云ふは

こころしはうらやとこころ
 らぬぬれくれをををるへし

牛の跡をみよむありて

風をよむ風の子をよむ

梅二

あひれよあひれをよむ

少房よらの物古う日のまて

飽きよあまのつらき

ねね人ねを街眺る

米のりにはをよむ

老をよむ梅川のるをよむ

團まよのつらき

りねのよむ

せまの世

世文高

道まの善法にん

あはれをよむ

えよのりにはをよむ

子の号みの歌をよむ

耕してはをよむ

お合ひ梅枝をよむ

川をよむ

弟をよむ

振下り大繩の物

疾如の良む

くやれをよむ

世まの人の家

瓶をよむ

やうよあはれ

梅 文 高 世 文 高 梅 文 高 梅 文 高 梅 文 高 梅 文 高 梅 文 高 梅 文 高 梅 文 高 梅 文 高

舟

あまの敷

あまの敷

くさ

うしし水 川の流る

岸はあなをらつておきしぬ

二七位の手お掃り

あまの敷 未ぬさき

ちきり

あまの敷 一とりのきり 湖

あまの敷 のつとりの船やあつ月 光る

あまの敷 とつとりの船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

あまの敷 月にはあまの敷の船やあつ月 光る

上ノ
○おれまのあや

かへき

かえり
よのれをいと

早うて
うみを待つ 松二
杖

○長門・雨にまよふ 且宮らふ

おの夜昔 松島情

○越前 雨は行先

○松原の六井、草子、谷田、古道、入

○関ヶ原の 赤松元、渡り、立石、道か

松平とさるる

ふた

○おれの美

いふう 松島

あ破れ花

かきり 松島

○こゝに 松井とて

松原の 松島、井の 松島、

○お井おまの 松島

おれまの 松島

松島 松島

松島 松島

松島 松島

又の 松島

松島 松島

松島

上方

十條

上

や下り舟

下

北條の橋

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

下

あまのこ

おきよの月

月夜の中

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ